

序

稻賀 繁美

『日本研究』本号は、特集号として、所内シンポジウム「近代東アジアの美術史学、建築史学、考古学の成立——文化財行政とその周辺——」(平成十三年六月十五・十六日)で発表された報告論文を中心に編む。以下、シンポジウムの意義、目的、成果を手短に報告し、本号の序および導入に代える。

平成十三年(二〇〇一)六月十五・十六の両日にわたって、標記のようなシンポジウムを催した。近代東アジアにおける美術史学、建築史学および、考古学の成立を問うとき、それが欧米の学術の移入の一環をなすばかりでなく、東アジア側の民族意識、国民国家としてのアイデンティティーをめぐる政治とも密接に結び付いていることは、近年の研究が明らかにしてきたところである。しかしながら、今日までそうした学問的営みの自己反省は、ともすればそれぞれの専門分野のなかに限定され、それぞれの国の専門家がばらばらに検討している嫌いがなくもなかった。たまたま国際日本文化研究センターでは、美術史学、建築史学、考古学の領域にわたって、共通の問題意識をもつ研究者が客員を含めて滞在していた。この機会を利用して、専門部門間の情報交換と、中国、韓国、日本さらには東南アジアにおよぶ事例を比較する試みが、今回のシンポジウムの眼目となった。

序

副題としては「文化財行政とその周辺」を掲げた。それは主題にあげた研究分野が、その出発点にあって、いずれも文化財概念の確立やその

政策的な施行との関連のなかで立ちあげられた学問分野だからである。とりわけ明治後半の日本で行政的に確立された文化財政政策は、たんにそれが韓半島や中国で実地検証されたというにとどまらない。「日韓併合」ののちの韓半島での発掘作業や文化財政は、日本本土では不可能な発掘調査をも可能とし、黒板勝美らによって主導された政策は、むしろ内地での施政のモデル・ケースを提供するような革新的な試みをも含んでいた。また関野貞に代表される中国歴史建築の実地調査は、中国本土においても未曾有の探査であり、その後の研究の礎石を据えた部分も認められる。

とはいえ、こうした先駆的な学術研究が、大日本帝国の拡大と無縁ではなく、むしろその大陸進出と手に手を取って進展したこともまた、疑いない事実である。学術研究が帝国主義的な植民地政策と結託していたと断罪することは、あまりに容易だろう。だが今回の会議は、学術の政治との結託を理由に、学術を糾弾して^お畢れり、とすることを目的とはしていない。またその反対に、学術的な意義ゆえに、これらの先駆的業績を政治から救出しようとすることもまた、企画者の意図ではなかった。もとより美術史学、建築史学および、考古学といった学問分野の成立と発展は、世界的な植民地状況なくしてはありえなかった。このことを確認したうえで、それがその後、韓半島、中国大陸を含めて、国民国家意識確立の紐帯^{ちゆうたい}として機能し、日本支配、日本侵略の文化的遺産として、今日に至るまで、各国の学問のありかたのみならず、文化意識、民族意識のありかたそのものまでも規定しつつ、方向づける役割を担ってきたこと。その具体相を、歴史的な視野から回顧し分析することが大切だろう。さらに戦後の日本にあっては、戦中の学問姿勢への反省もあって、戦前の文化財政が韓半島や中国大陸におよぼした影響そのものに目を瞑^つる傾向がなくなかった。また朝鮮や中国側でも、日帝時代のすべてを恥部として暗黒に塗り込め、かえって歴史の実態に肉薄する責務を疎かにする傾向もあった。そうした時代的制約は、それはそれでその時代の世相や社会的状況の理解に役立つものとして尊重すべきだが、それが学問史の過去を隠蔽し、安易な自己肯定へと結び付くならば、そこにはおおきな危険が待ち受けている、と言わざるを得まい。

今回の二日間のシンポジウムでは、そうした広大にして多くの問題を含む領域全体を踏査できたわけではない。むしろ各専門分野では自明とも見える具体例を、それ以外の領域の事例と結び付けて比較検討し、二十世紀前半の学問史を問い直すことに眼目があつた。このため、狭義の東アジアからは外れるが、看過しえない比較例として、フランスのインドシナにおける文化財政の事例の報告も得、また比較文学の視点から、近代東アジアにおける東洋回帰とでも称すべき現象を、一国の視野には限定されない刺激伝播と時代的潮流のなかに位置付ける工夫もした。さ

らに、今回のシンポジウムでは発表の機会を得なかったものの、西原大輔氏による「近代日本絵画のアジア表象」のご寄稿を戴き、著者ご本人からこの論文を今回の小特集のなかで刊行することにご快諾を得た。これらの論文がお互いに歴史の様相を照らし合って、今後のさらなる探求への指針を示すよすがとなれば幸である。

なお当日のプログラムを以下に採録し（表1）、読者の参考にする。本特集は、ここでの発表のうち、ご寄稿戴いた論文に限定して編まれたものであることをお断りする。ここには収録できなかった論文も、この間別途公表されている。^{*}シンポジウム企画者として、ご参加いただいたおおくの研究者、貴重な発表を戴いた発言者に、一言御礼申し上げます。

また、最後になるが、韓国語の表記やハングルおよび漢字の復元・併記には、大阪大学大学院博士課程研究生（当時）の李美林氏に、格別のご協力を賜った。

（企画責任者）

表1 シンポジウム「近代東アジアの美術史学、建築史学、考古学の成立——文化財行政とその周辺——」プログラム

平成十三年六月十五日（金）

一三：三〇 開会 主旨説明 稲賀繁美 Inaga Shigemi（日文研助教授）

一四：〇〇—一五：〇〇 裴炯逸 Pai Hyung-il（日文研客員教官）

国家遺跡と祖地をめぐる係争…大韓民国の文化財行政施策と日本植民地時代の遺産

一五：〇〇—一六：〇〇 徐蘇斌 Xu Subin（日文研客員教官）

関野 貞と中国建築史研究

一六：三〇—一七：三〇 李成市 Lee Sung-si（早稻田大学教授）

黒板勝美にみる植民地と歴史学

平成十三年六月十六日(土)

10:00-11:00 佐藤道信 Satō Dōshin (東京芸術大学助教授)

近現代日本の美術政策と東アジア美術研究

11:30-14:30 西槇 偉 Nishimaki Isamu (愛知県立大学助教授)

東洋回帰の動きと民国期の中国美術界・李叔同・豐子愷を中心に

14:00-17:00 藤原貞朗 Fujihara Sadao (茨城大学助教授)

フランス極東学院によるアンコール美術史編纂過程とその問題

17:30-19:30 総括討論

*なお、本号には収録できなかった発表のうち、李成市氏の論文は、「コロ

ニアリズムと近代歴史学——植民地統治下の朝鮮史編纂と古跡調査を中心

に」として、泉谷周三郎・根本萌騰子・木下英夫編『崩壊の時代に』同時

代社 二〇〇二年 一六一—一八四頁に、また、佐藤道信氏の発表は

『日本美術という制度』として、『近代知の成立 一八七〇—一九一〇年代

1』(岩波講座 近代日本の文化史 3) 岩波書店 二〇〇二年 五三—

八二頁に収録された。さらにこの間、東京文化財研究所での科学研究費

補助金による研究(研究代表者 米倉迪夫)の報告書として、『日本にお

ける美術史学の成立と展開』東京文化財研究所 二〇〇二年 が出版され

ている。そのほか、本論文集編集に前後して発表された、関連する論文と

して、

・金恵信『韓国近代美術におけるジェンダー:植民地期官展の女性イメージをめぐって』熊倉敬聡・千野香織(編)『女?日本?美?』慶應義塾大

学出版会 一九九九年 六三一—八〇頁

・池田忍・金恵信『植民地「朝鮮」と帝国「日本」の女性表象』(岩波講座 近代日本の文化史 6)『拡大するモダニティ 一九二〇—一九三〇年代

2』岩波書店 二〇〇二年 二五五—三〇七頁

・木下長宏『美術史はいかに書かれてきたか——明治二〇—三〇年代に

おける美術史記述——』洪善杓『東洋画』誕生の光と影、廖瑾瑗

『台湾近代画壇の「ローカルカラー」そのほかを含む、岩城見一(編)『芸

術/葛藤の現場:近代日本芸術思想コンテクスト』晃洋書房 二〇〇二

年 各三二—四八頁、一七五—一八九頁、一九〇—二二二頁

などが公刊されている。また『美術フォーラム二二』第六卷には「越境す

る学術:二〇世紀前半の東アジア遺跡保存政策:帝国主義的状況下の美術

史学、建築史学、考古学」と題した拙文(四〇—四六頁)で、本特集の案

内を兼ねた問題提起をし、いくつか関連論文を注記している。併せてご参

照いただけると幸いである。